2023（令和５）年度

知識集約型社会を支える人材育成事業

新時代の地域のあり方を構想する
地域戦略人材育成事業

クロスディシプリン研究紀要

大正大学
スガモで育む日本の未来。

目　次

巻頭序言 ………………………………………………………………………… 1

1．紀要論文

（1）クロスディシプリン教育と「学融合ゼミナール」…………………………… 2

（2）仏教学とクロスディシプリン ……………………………………………… 8

（3）公共政策学とクロスディシプリン ………………………………………… 10

2．調査結果

（1）　学融合ゼミナールⅠ「研究成果」（仏教学科）…………………………… 12

（2）　学融合ゼミナールⅠ「研究成果」（人文学科）…………………………… 14

（3）　学融合ゼミナールⅠ「研究成果」（歴史学科）…………………………… 16

（4）　学融合ゼミナールⅠ「研究成果」（公共政策学科）……………………… 18

（5）　学融合ゼミナールⅠ「研究成果」（人間科学科）………………………… 20

（6）　学融合ゼミナールⅠ「研究成果」（地域創生学科）……………………… 21

巻頭序言

大正大学　学長
髙橋 秀裕

Society5.0 社会の到来とともに変動の激しい社会に向けて、コミュニケーションを基盤とした交渉力やデータサイエンス教育の充実など、いまや大学においてもこうした実践的な学びが必須になってきています。

本学では、目指すべき新時代の人材像を「地域戦略人材」と呼び、これを「多面的な性質をもつ地域の課題解決に向けて異なる専門分野の多様な人材を統合し、調整する新しいリーダー」と定義し、地域をけん引するアントレプレナーシップを身に付けた地域戦略人材を育成するための教育プログラムを全学的に展開しています。

学融合教育については、統合型の教養教育である共通教育科目（第Ⅰ類科目）として、学融合・学際・課題解決型の教育プログラムを構築していますが、加えて、各学科の専門科目（第Ⅱ類科目）においても、学融合教育（クロスディシプリン教育）として、「学融合ゼミナール」を２・３年生の全学生を対象に実施しています。全学科の教員が協力して、学際的・学融合的意識・知見を学生が持てるような教育活動を推進しています。これによって学生が、それぞれの専門分野を学修し、この段階で他分野の学びを統合・関連付け、思考する学融合の視点を会得しながら、社会で活躍できる知識と実践力を身につけるための能力・資質を得ることができればよいと考えているわけです。

今後は、教室内の授業だけではなく、より実践的な取組みとして、学融合の能力を備えた優秀な学生を集めてサミットを実施することや、クロスディシプリンフィールドワークを京都のエリアキャンパスを活用しながら実施することにより、社会との接点も広げます。こうしたことを通して、学生は自身の専門分野と他の専門分野を統合し、柔軟な思考を得て、異なる分野や背景を持つ人々との連携や問題解決能力、コミュニケーション能力をさらに高めることができると思います。

現代の社会問題は複雑化し、一つの専門領域のみでは解決が難しくなっています。また、学んだ知識や技術をどのように実践するかどうかも問われています。複雑化・多様化する社会の中で、クロスディシプリン教育に関する実践研究が今後の学生への教育活動に寄与し、研究成果による教育活動の改善・検証を大いに期待しています。

クロスディシプリン教育と「学融合ゼミナール」

学長補佐・教務部長
クロスディシプリンチーム長
小林 伸二

はじめに

本学では、令和２年度に大学教育再生戦略推進費「知識集約型社会を支える人材育成事業」の文理横断・学修の幅を広げる教育プログラムとして「新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業」が採択された。こうして、幅広い学融合の知識や創造力、変化に対応する力、異なる分野のネットワーク結節点となるためのコミュニケーション力を、本学で学ぶ全学生に身に付けさせることにより、我が国において新時代の地域を牽引するアントレプレナーシップを身に付けた「地域戦略人材」の育成を目指すことになった。

この中で、実施体制の一つとして「クロスディシプリン教育ラボラトリー」が新設され、計画的に学科教育を担当するコーディネーターを配置し、学部学科の根幹となる専門教育を担う第Ⅱ類科目において学融合・学際的教育の推進がはじまった。具体的には、第Ⅰ類（統合型教養教育）と第Ⅲ類（キャリア教育）との整合性・有機的連関をはかるため、第Ⅱ類科目として「学融合ゼミナール」を必修とし、所属学科の専門領域を中心に他領域の知識・技能の修得を意識させせることに重点がおかれた。同ゼミナールでは、学生が他学科領域を学び、プレゼンテーション、ディスカッションを通じて、複数の知識・ディシプリンの強化がなされることになる。さらに、DP「自らの専門分野の学問領域と他学科の学問領域を統合的に学び、多面的・重層的な思考をすることで、複雑で多様な現代社会の課題に応えることができる」のもと、コーディネーターと学科教員のチーム・ティーチングによる学修支援を構築し、学生に卒業論文テーマについて多様な視点を修得させせることを目指した。

本稿では以上の事業における、本学でのクロスディシプリン教育と「学融合ゼミナール」に対して、クロスディシプリン教育ラボラトリーでの研究成果の一端を提示するものである。

1　クロスディシプリンの定義

人類は異なる学問分野を、ディシプリン（分野、領域）として発展させ、人類の「生存のための知」を形成させた。したがって、ディシプリンの基礎を深く学んだ学生自身の中で 、独自の融合や総合が行われることこそ重要であると考えられてきた（兵頭俊夫 2005）。ただ、この学びの独自の融合や総合は、個人の学びとしてそう簡単にできることではない。そもそも、一般に人文系の研究は全体として専門の深化が進み，研究者の独立性もきわめて高く、社会調査やフィー

ルドワークを要するような一部の領域を除いて、チーム作業とは無縁の場合が少なくなく、異分野の融合という発想自体に、親和性がかなり低いという指摘がある（戸矢理衣奈 2020）。しかしながら、一方ですでに現代社会では研究領域の融合、教育での文理融合の必要性が示されている。中央教育審議会「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」において、「文理横断、学修の幅を広げる教育では、すでに学術研究においても産業社会においても、分野を越えた専門知の組合せが必要とされる時代であり、一般教育・共通教育においても従来の学部・研究科等の組織の枠を越えた幅広い分野からなる文理横断的なカリキュラムが必要となる」、と見据えている（中央教育審議会 2018）。工学分野でも「多様な領域の専門知を集結させ，分野をまたいだ統合的な知によって複数の「答え」を探求していくことが一つの道筋として有力視される。そのためには，学問または専門分野が，互いの枠組みを乗り越えて出会ったり交わったりすることで生まれる「統合的な知」が必要」という（竹永啓悟 2021）。

こうして、ディシプリンの融合や総合の難しさのなか、確実に分野を問わず、文理融合など「統合的な知」が社会的に求められているわけである。本学では事業採択後、あらためて第Ⅱ類科目としての「学融合ゼミナール」開設にあたり、クロスディシプリンについての定義と教育目標を（村上学等 2011）によりながら次のように定めた。

【定義】

複数のディシプリン（分野、領域）の間の連携や交流、そして融合を意味し、その教育とは、異なる分野の専門知識を横断的にとらえ、新たな知として形にする力の育成を目指すものとする。

【教育目標】

- 「繋がりを見出す」「融合させる」の視点から、クロスディシプリンすなわち「複数の分野・領域の連携とそれらの融合を実現できる」ような、より総合的な融合実践型の知性の教育
- 分野融合の「知」は「新しい知」で、既存の知識としてそれを直接学べるものではなく、自身の専門性に根ざし、自らの経験や知識を、ふさわしいスキルに基づいて生み出す。
- 「常に」学んでいこうとする態度や、好奇心がなくてはならない。
- 学生が地域・社会等と学科の学びのクロスディスプリンを実現する。

本学のクロスディシプリンの定義と教育目標は、Ⅰ年次の「基礎ゼミナール」など第Ⅱ類の学科専門領域の学びと連動しながら推進されることになっている。この場合、学生は専門分野の特性を把握し、各分野における専門性に応じて、適切な融合を実現することができるものと考えられる（竹永啓悟 2021）。したがって、第Ⅱ類の専門分野の基礎教育、なかでも領域独自の研究方法、問題の所在、体系と法則などの知識の習得は、クロスディシプリン教育の前提として極めて重要であるといえる。専門知の知識提供教育がクロスディシプリンへの前段階であり、軽視できないのである。それではつづいて、「学融合ゼミナール」の内容について確認しよう。

２「学融合ゼミナール」

「学融合ゼミナール」は第Ⅱ類科目として２年春学期のⅠと３年春学期のⅡを全学必修と位置づけている。また、クロスディシプリンの視点から、専門領域の融合を学科単位の学びを前提に、

学科 cross の推進を奨励した。本学では社会創造系学部群（地域創生学部・公共政策学部・表現学部）と探究実証系学部群（仏教学部・心理社会学部・文学部）の２つの区分によりカリキュラムが構成されているため、次のような両学部を交流する学科 cross を基本としたプログラム案を提示した。

【学科 Cross 案】

歴史学科・地域創生学科　人文学科・公共政策学科　日本文学科・社会福祉学科
仏教学科・表現文化学科　臨床心理学科・地域創生学科　人間科学科・公共政策学科

こうした学科 cross に基づき、学科専任教員のなかから選任されたコーディネーターが、cross 先学科との調整など同ゼミナールの円滑な運営と学修支援の役割を担う。

そして、「学融合ゼミナール」ではそれぞれの定義と目標、そして評価を次のように定めた。

【学融合ゼミナールⅠ】

【定義】
学科カリキュラムの履修「縦の学び」と学科を超えた領域横断的「横の学び」による専門教育

【目的】
自専攻とは異なる専門領域の学びから多面的・重層的な思考を獲得し、複眼的な視野を養う

【評価】
卒業論文テーマについて多様な視点を修得するため、プレゼンテーション、アカデミック･エッセー（1600 字）

【学融合ゼミナールⅡ】

【定義】
複雑で多様な現代社会に応えることのできる「地域戦略人材」教育

【目的】
複数のディシプリン（分野、領域）の連携と交流、相互理解を通して現代社会の課題を解決する力を養う

【評価】
卒業論文テーマについて多様な視点を修得のため、プレゼンテーション、アカデミック・エッセー（1600 字）

定義については、第Ⅱ類の学科科目、中でも領域研究・教育の核となる基礎的学修を提供する「基礎ゼミナール」、また、専門的学修を提供する「専門ゼミナール」を「縦の学び」と、「学融合ゼミナール」を「横の学び」と位置づけている（戸矢理衣奈 2020）。さらに、目的別にⅠには領域横断的学修を、Ⅱは地域戦略人材学修を担うものである。評価はプレゼンテーション、ディスカッションを通じて、複数の知識・ディシプリンの強化から卒業論文につながるアカデミック・エッセーを課す (1)。

講義内容に関しては、次の通りである。

【学融合ゼミナールⅠ】

■探究実証系学部群

学科専門領域と地域学　　＋　cross 社会創造系学科の地域学

■社会創造系学部群

学科専門領域と人文科学　＋　cross 探究実証系学科の人文科学

【学融合ゼミナールⅡ】

■探究実証系学部群

学科専門領域と現代社会　＋　cross 社会創造系学科の現代社会

■社会創造系学部群

学科専門領域と人間学　　＋　ross 探究実証系学科の人間学

「学融合ゼミナールⅠ」において探究実証系学部群では、学科の研究・教育の領域に「地域」の視点を取り入れたテーマを推奨し、一方の cross 先の社会創造系学科から改めて「地域」を展望する授業を行ってもらう (2)。社会創造系学部群では、学科の研究・教育の領域に「人文科学」の視点を取り入れたテーマを推奨し、一方の cross 先の探究実証系学科から改めて「人文科学」を展望する授業を行ってもらうというものである。学科研究領域と「地域」、「人文科学」のクロスディシプリン教育による多面的・重層的な思考の獲得を目指した。また、「学融合ゼミナールⅡ」においては、探究実証系学部群の学科での研究・教育の領域に「現代社会」の視点を取り入れ、一方の cross 先の社会創造系学科から改めて「現代社会」をテーマに授業を行ってもらう。社会創造系学部群では、学科の研究・教育の領域に「人間学」の視点を取り入れ、一方の cross 先の探究実証系学科から改めて「人間学」を展望する授業を行ってもらうというものである (3)。学科研究領域と「現代社会」、「人間学」を通じた複数のディシプリン（分野、領域）の連携と交流を目指した (4)。

　開講形態は、ゼミナールではあるが、各学科 1 クラスの多人数の講義型により、Zoom、Teams の機能を活用したグループワークに基づきアクティブラーニングを実施し、グループワーク内でのプレゼンテーションを必須として、アカデミック・エッセー作成に導くものである。なお、実施事例として、14 回の授業内訳（案）を以下の通り示した。

【実施事例】

　学科パート 5 回（学科専任教員）―横断パート 5 回（他学科専任教員）―学科パート 4 回（学科専任教員）

「学融合ゼミナール」は原則、学科専任教員、cross 先学科専任教員によるオムニバスで展開され、推奨テーマに関わる各教員の学科研究領域と他学科研究領域のそれぞれの視点に基づく、多様な授業がコーディネーターの運営のもとなされる。歴史学科の学生を対象とした、地域創生学科 cross「学融合ゼミナールⅠ」の「地域」をめぐる授業案は次の通りである。

〔学科パート〕

第 1 回　歴史における地域
第 2 回　地域の日本史ー古代・中世
第 3 回　地域の日本史ー近世・近代
第 4 回　地域の東洋史ー古代・中世
第 5 回　地域の東洋史ー近世・近代
第 6 回　地域の文化財・考古ー古代・中世
第 7 回　地域の文化財・考古ー近世・近代

〔横断パート〕

第 8 回　地域の政治ー地方自治
第 9 回　地域の経済ー流通とサービス
第 10 回　地域のきまりー伝統と社会

〔学科パート〕

第 11 回　歴史と地域経済
第 12 回　歴史と伝統社会
第 13 回　アカデミック・エッセーに向けて
第 14 回　まとめー学融合・プレゼンテーション

おわりに

以上が本学の推進するクロスディシプリン教育と「学融合ゼミナール」の概要である。

事業採択にともない、第Ⅱ類に係る学則の改正、DP の追加・補足がなされたが、第Ⅰ類の総合型融合教育との連携、卒論までの過程におけるクロスディシプリン教育の位置づけ、専門性に根ざした「地域戦略人材」、第Ⅲ類のキャリア形成への接続性など、いまだ試行錯誤のなかにある。今後も不断のイノベーションが必要と考える。ただ一方で、クロスディシプリン教育ラボラトリーでの研究成果から、学融合の視座も明確になりつつあるように思われる。

授業の展開として、学生にはグループワーク、プレゼンテーションから、まずは学科内の学び、そして学生同士の異なる視点を実感し、他学科の異なる学びからは、共有と交渉を通じて、「cross 領域の形成」にもとづく、自学科の学び、あるいは卒論、キャリアへの意識を醸成してほしいと考えている。それにはクロスディシプリンに関する「態度と好奇心の重要性」を認識させるため、各回のリフレクション、コーディネーターや大学院生らによる学融合支援が重要であり、学生同士の「学融合知」をめぐる「理論」と「実践」の往還を前提とした活発な交流などが、「学融合ゼミナール」の今後の課題であると考えられる (5)。加えて、ICT の進化にともなう教育 DX の進展による（山本敏幸・濱本久二雄 2021）、プレゼンテーション、アカデミック・エッセーのデータ化と学修の蓄積と可視化、経年変化も不可欠な検討課題である。

さらに、実際に開講に向けた段階で、研究領域を異にする教員間の、あるいは学科学部の枠を超えた連携の難しさが存在した。これは、現場の教員の苦労・努力、コーディネーターへの負担となったが、クロスディシプリン教育自体、研究者である教員 cross を前提とした学科 cross、すなわち個々の学生 cross を含めた人間 cross であって、大学教育での壮大な人間をテーマとするカリキュラム構想の具現化の一つの到達点であることを示唆していると考えられる。

したがって、本事業におけるクロスディシプリンは、本学の建学の理念「智慧と慈悲の実践」を使命とした、教育ビジョン「４つの人となる」の一翼を担う重要な企画であり、あらためて学内外に対する成果が求められるといえよう。

註

（1） 寺田徹 2014 は学融合のために必要な力として、「勉強する力 < 学問する力 < 創造する力」を挙げ、学問する力 (探求力、考察力、論理的思考力など) や、創造する力 (対話力、柔軟性、発想力など) のほうが大事であると見做す。評価にあってもこうした視点は有用であると考えられる。

（2） 地域をめぐる「地域学」に関しては、西村千尋等 2014、山下祐介 2021 参照。

（3）「人間学」は「大正大学の教育ビジョン「４つの人となる」建学の理念「智慧と慈悲の実践」から導かれる、他者に奉仕、真理を求め、道徳的に生き、共生（地域創生）を目指す人間育成と定義づけている。

（4） 人文科学と社会科学の融合に関しては、佐藤学 2014 参照。

（5） 学生交流と「理論」と「実践」に関しては、学融合イベントや新たな科目の創設を準備している。

参考文献

佐藤学 2014「人文・社会科学融合領域分野の展望と大型研究計画」『学術の動向』6

竹永啓悟 2021「工学分野における文理融合型プログラムの意味：博士課程教育リーディング大学院プログラムの履修生に対するインタビューから」『評論・社会科学』139

中央教育審議会 2018「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」

寺田徹 2014「学融合と農村計画教育」『農村計画学会誌』33―2

戸矢理衣奈 2020「「文理実」の視点で捉える「文理融合」の挑戦 三つの課題と実務家の参加による展開可能性について」『生産研究』72 － 5

西村千尋・山田千香子・吉居秀樹 2014「「地域学」の内容とその学びに関する一考察」『長崎県立大学経済学部論集』48 － 1

兵頭俊夫 2005「教養教育とディシプリン」『学術の動向』7

村上学・本田宏隆・佐藤喜一郎・野澤肇・竹内謙 2011「ICT の仕組みによるクロスディシプリンの実現」『大学 ICT 推進協議会 2011 年度年次大会 論文集』

山下祐介 2021『地域学入門』筑摩書房

山本敏幸・濱本久二雄 2021「ICT 活用による文理融合型のクリティカルシンキング力を涵養するカリキュラムの試行」『関西大学高等教育研究』12

仏教学とクロスディシプリン

仏教学部 仏教学科
准教授
長澤 昌幸

2022年度Ⅱ類コーディネーターとして学融合ゼミナールⅠに携わった際の所感をまとめたい。仏教そのものが、様々な地域や多様な言語及び文化と融合し、形成されてきた歴史がある。そのため、教理学、文献学、図像学など研究領域も多岐にわたり、それらを多角的な視点から研究されている。しかし、それを単一の講義内で展開することは容易ではない。

その意味で今回の学融合教育は、講義展開上でその多角的な視点を学修することを目指す講義であり、同一学科の研究領域を横断的に学修し、なおかつ、他学科の研究領域とも横断的に学修することを目的としている。

仏教学科で実践した学融合ゼミナールⅠでは、「学融合教育の概要」による教育目標を踏まえ、受講生には、学融合で学修する意義について３つのアプローチをコンセプトに基づき展開した。その３つのアプローチとは、意味的（歴史的）（５回）、身体感覚的（５回・他学科）、視覚的（４回）である。これは景観を把握するためのアプローチを援用したものであり、縦横の学修を風景・景観に見立て、それをデザイン或いは把握するための方法として示すことを意図した。そのアプローチは、

1，意味的（歴史的）アプローチとは、仏教学科で学ぶ意義を再確認すること。
2，身体感覚的アプローチとは、他学科の学びで自己の知的領域を拡充すること。
3，視覚的アプローチとは、教材の活用方法により知的好奇心を引き出すこと。

である。以下、その内容を略述したい。

意味的（歴史的）アプローチでは、大正大学の歴史及び設立四宗派を開いた祖師の生涯と教え、特にその教団と地域との結びつきを主として学ぶように設計した。その理由の一つには、学融合ゼミナールⅠの開講時期が２年次春学期にあたるため、Ⅰ類科目とⅡ類科目を接続する科目としての役割を有していると考えたからである。また、宗学コースの学生にとっては、他宗派の祖師について学修する機会が少ない。さらに「地域」という視点での学修は、祖師の生涯や教えがどのように伝播したのか、教団がどう拡大したのか、地域とどう結びついたのかなど、探求すべき課題として貴重だと考えたからである。

近年、話題となった「鬼滅の刃」などのアニメやエンターテインメントには、仏教的要素が過分にあることが話題になっている。そのため、地域コミュニティの中心が寺院や神社など宗教施設であったことを再発見する意味もあり、身体感覚的アプローチとしては、表現文化学科教員による視点の異なる講義から街文化を思考することを主眼とした。寺院などを中心として

寺内町や門前町が形成され、そこには商業を中心とした様々な施設が含まれている。さらに、その地域では、仏教に関わりながらも独自の街文化が形成されてきた要素もある。受講生には、新たな思考性、特に地域のとらえ方などの知見を得ることができたと言えよう。

視覚的アプローチでは、仏教が幅広い階層に対しどのように布教されてきたのか、その過程で様々な工夫が実践されてきた。その一つの証左が仏教芸能であろう。今回、視覚的な学修としては、夏の風物詩であり、本学でも実践されている盆踊り、その源流とされている「踊り念仏」を取り上げた。全国に点在する踊り念仏やそれから派生した念仏踊りなどの仏教芸能について映像資料を参照し、踊りの身体性や称える詞や独特の節回しなどから、何を意味するのかなど思考力を意識した問いを示した。

また、新たな試みとしては、アクティブラーニングの教材として凸版印刷株式会社が開発した ETOKI システムを導入した。このシステムは、デジタルアーカイブデータ上に情報集約することで、学術研究や文化財鑑賞に役立てることを目的として開発されたものである。今回、凸版印刷が持つデジタルアーカイブデータ上に、時宗総本山遊行寺が所蔵する国宝『一遍聖絵』第７巻所収「市屋道場の場面」を使用した。受講生は、用意した設問事項に従い、デジタルアーカイブスデータ上にコメント入力を行った。そのコメントは受講生が相互に閲覧でき、また、そのコメントに対し、他の受講生が質問や意見などのコメント入力が可能であるため、受講生同士がデジタルアーカイブス上でアクティブラーニングを体験できた。

さて、３つのアプローチを用いて講義を展開した結果、受講生がそれまでインプットしてきた知識を主体的・対話的に表現し、外発的（他の研究領域）及び内発的（専攻する研究領域）な学修効果を得られたと考えられる。また、受講者は ETOKI システムを活用し入力した内容をもとに、これまで培った基礎力（言語・情報などのスキル）、思考力（発見力・創造力・論理的・批判的思考力）、実践力（人間関係形成力・自立的活動力）の３つの能力を重層的に深めることができたと言える。

このことから、学融合ゼミナールⅠを展開することで実感したことは、学融合教育の実践が受講生自身の学ぶ姿勢や意欲を引き出す意味でも有意義であり、カリキュラムの展開により横断的・総合的な学修が可能であると言える。今後は、更に学生のアンケート結果も参考にしながら講義形態やグループワークの方法、ディスカッション課題、より主体的な学修をどう促すかなど検討すべき課題に対し、更なる創意工夫を重ねていきたい。

公共政策学とクロスディシプリン

社会共生学部 公共政策学科
教授
本田 裕子

公共政策学は社会で解決すべき問題の発見・原因の解決を目指す学問領域といえるが、問題の様相は複雑であり、その解決には１つの専門領域にとどまらず、複数の領域を組み合わせた学際的な視点が必要となる。

本学公共政策学科は、設立当初から学際的な学びを意識してきた。人間環境学科の改組により2020年に設立された学科であり、人間環境学科では、環境政策と観光文化の２つの柱でカリキュラムを展開してきたが、公共政策学科ではそれらに加えて、政治学、行政学、社会学、経済学といった社会科学における基礎領域分野での学びを強化し、そして福祉や外国人労働等を含めた多文化共生という近年の社会問題に対応している応用領域分野の学びができる組み立てをし、それを学科の特徴としている。2022年度から全学的に実施されている「学融合ゼミナール」で目指すクロスディシプリン教育は、他学科の学びを加えることになるので学際的な学びを前提とする公共政策学において親和性が高いといえる。本稿では本学科の「学融合ゼミナールⅠ」での学びを報告するとともに、筆者の専門領域である環境分野での学融合のあり方についても報告したい。

2022年度に開講された「学融合ゼミナールⅠ」では、公共政策学科は人文学科とのクロスディシプリン教育を展開した。第１回のガイダンスを除き、第２回から第５回を公共政策学科の教員、第６回から第10回を人文学科の教員が講義を担当した。第２回は政治学、第３回はメディア社会学、第４回は観光学、第５回は環境学、第６回は哲学、第７回は宗教学、第８回は文化人類学、第９回は教育社会学、第10回は言語学を専門とする教員が、それぞれの専門領域から「公共」について講義をする、という形式をとった。多様な専門領域の講義がなされる中で、「公共」という共通軸を設けることとした。講義では、担当教員の専門領域での「公共」の位置づけや担当教員が専門領域をふまえた「公共」の解釈について説明し、個人ワークやグループワークも適宜取り入れた。

第11回から第13回はそれまでの学び、中でも人文学の学びを自身の学び、具体的には今後の公共政策での学びにどのように活かしていきたいかをアカデミックエッセイとしてまとめ、その内容に基づいてグループワークを行い、第14回でグループごとの発表を参加者全員の前で行った。

学生たちのアカデミックエッセイの概略を一部紹介すると、ある学生は、外国人の受け入れをめぐる問題に着目し、第10回の言語学の講義を通じて、「国際共通語としての英語」が「ESL語（English as a Second Language）」として論じられていることを知った。そして文法の正確さよりも相互理解を重視しているという視点を異文化受容に活用することで、日本において外国人を受け入れる上での問題とされる「言葉の壁」や「心の壁」へのアプローチをより効果的に

実施できる可能性があることに気づき、ESL 語の認知度を広げ、大学生による交流イベントの事例も調べた上でその有用性を考察していた。

別の学生は、第９回の教育社会学の講義で「アファーマティブアクション」という用語を知り、公共政策学での学びにおいて、属性にとらわれず誰もが社会の中で活躍できる世界を目指す上で、日本における男女間の雇用格差に着目し、その現状と課題を考察していた。

また、別の学生は、第８回の文化人類学の講義を通じて、第３Q で本学科が取り組んでいる「フィールドワーク」についての理解を深めていた。講義では、フィールドワークは、"field work" ではなく、"community-based research" と呼ぶ方がふさわしく、上から目線の「〜してあげる」という意識からの脱却が必要であること、そして対象地域に深く長く寄り添う意味での協働が重要であることを学んだ。このように、学生たちは人文学の領域に公共政策についての学びを見出し、今後の公共政策を通じた学びを深めていこうとしていることが伺える。

なお、筆者は「学融合ゼミナールⅠ・Ⅱ」の学科でのコーディネーターを務めるにあたって、参考資料を作成するという目的で、公共および公共性・公共圏について、自身の専門領域に引き付けた論考をまとめた（本田 2022；本田 2023）。拙稿の前者では、"public" を学ぶ上では、"people"、すなわち「人々に関する」という視点が重要であること、"community" から "international" まで多元的に理解することを整理した。また公共哲学の議論を用いて、「公共善」・「公共悪」の概念を世界遺産や公害を例に紹介した。後者では、「公共性」や「公共圏」について、ハンナ・アレントとユルゲン・ハーバーマスの議論を紹介し、現代社会の公共にかかわる問題の例として SDGs（持続可能な開発目標）の目標や評価を挙げ、さらに筆者の研究事例の１つであるノラネコ問題の現状と課題を挙げた。

筆者の専門は環境分野の中でも野生生物保護論であり、主に環境社会学の視点から人と野生生物とのかかわりをふまえて、「野生生物との共生」のあり方を探究している。事例研究にあたっては、環境社会学の領域に加えて、環境教育、農村計画、生態学や歴史・民俗学の領域の知識が必要となるし、現地調査の把握には過疎高齢化、農業や学校教育が抱える課題といった情報収集も必要となる。例えば井上（2002）も、フィールド研究におけるハイブリッド・アプローチの重要性を述べていることから、筆者も自身の研究歴を「学融合」の視点で説明することで学生の理解を促すようにしている。

2023 年度は、「学融合ゼミナールⅠ」では前年度に引き続き人文学科と、そして新たに開講される「学融合ゼミナールⅡ」では人間科学科とクロスディシプリン教育を展開する。本学科での多様な学びに加えて、人文学や社会学、心理学のアプローチを学ぶことで、公共政策での学びに重層性を持たせ、現代社会のさまざまな公共にかかわる問題の解決を担える人材の育成に引き続き務めていきたい。

文献

- 井上真（2002）「越境するフィールド研究の可能性」石弘之編『環境学の技法』東京大学出版会：215 − 257 頁.
- 本田裕子（2022）「学融合における『公共』についての学びを考える－大正大学公共政策学科での学びから－」『大正大学公共政策学会年報』2：73 − 84 頁.
- 本田裕子（2023）「『公共性』をテーマとした大学における『学融合』教育の実践」『大正大学公共政策学会年報』3：49 − 61 頁.

学融合ゼミナールⅠ「研究成果」ー調査（R5・2・2）

クロスディシプリン教育チーム

【学科名】（仏教学科）

以下の項目について回答してください。3月10日までにお願いいたします。

1　授業設計

仏教学科の学融合ゼミナールⅠでは、「学融合教育の概要（案）」による教育目標を踏まえ、履修対象学生には、仏教学科で学修する意義について３つのアプローチをコンセプトに実施した。３つのアプローチとは、意味的（歴史的）（5回）、身体感覚的（5回･他学科）、視覚的（4回）であり、概要は以下のとおりである。

１．意味的（歴史的）アプローチとは、仏教学科で学ぶ意義を再確認すること。
　自校史教育、日本仏教と設立四宗派及び地域など。

２．身体感覚的アプローチとは、他学科の学びで自己の知的領域を拡充すること。
　ひと、地域、まちをテーマに展開（表現文化学科担当教員による講義）。

３．視覚的アプローチとは、教材の活用方法により知的好奇心を引き出すこと。
　凸版印刷 ETOKI システムを導入して『一遍聖絵』第７巻「市屋道場の場面」を教材として使用した。

【学科パート】

1. イントロダクション【担当　長澤昌幸】
2. 大正大学の歴史と巣鴨【担当　長澤昌幸】
3. 日本仏教と天台宗【担当　木内堯大・長澤昌幸】
4. 日本仏教と真言宗【担当　大鹿眞央・長澤昌幸】
5. 日本仏教と浄土宗【担当　石川琢道・長澤昌幸】

【横断パート】

6. 街文化その１　吉本興業と関西　【担当　ヨシムラヒロム】
7. 街文化その２　松本人志と尼崎　【担当　ヨシムラヒロム】
8. 街文化その３　手塚治虫の東京　【担当　ヨシムラヒロム】
9. 街文化その４　北野武 / ビートたけしの浅草　【担当　ヨシムラヒロム】
10. 街文化その５　鈴木敏夫と名古屋　【担当　ヨシムラヒロム】

【学科パート】

11. 日本仏教と芸能、地域との関わり【担当　長澤昌幸】
12. 踊り念仏について①【担当　長澤昌幸】
13. 踊り念仏について②【担当　長澤昌幸】
14. まとめ【担当　長澤昌幸】

２　コーディネーターの役割

1. 学融合ゼミナールⅠのカリキュラムデザイン
2. 全講義のオンデマンド動画配信及び採点
3. 担当教員との連携協力
4. cross 学科担当教員との連携協力

3　cross 先学科との連携による成果

1．他学科教員との関わりの中で、新たな講義方法（映像作成、収録時間など）や思考（地域のとらえ方など）を得ることができた。
2．他学科学生からのコメントから、普段、所属学科の学生に対する講義では、気づくことのできない改善点など、個人的にも学びの多い機会となった。
3．仏教系大学でありながら、仏教を学ぶ機会が少ないというコメントが多数あり、今後の講義展開の参考にしたい。

4　クロスディシプリン教育に関する感想

1．クロスディシプリン教育の理念は、大変有効なものだと理解している。
2．コロナ禍及びオンデマンド開講のため、理念を講義に活かしきれていない。
3．現行のカリキュラムから、Ⅰ類とⅡ類を接続する科目としての位置づけにせざるを得なかった部分があり、今後、理念に即した講義展開を模索したい。

5　問題点等があれば記述してください

1．学融合ゼミが、他学科の学生と共に学べる講義と期待している学生のコメントが少なからずある。学びの幅を拡げ、学生自身の学ぶ姿勢や意欲を引き出すのも学融合ゼミナールの特徴だと考えられるため、今後、学融合ゼミ自体の講義形態や方法などを議論すべきかと思う。
2．オンデマンド型アクティブラーニングの試行として ETOKI システムを活用した。有効であることは、コメントや内容から評価できると感じた。しかし、ETOKI システムは経費が必要になるため、他の簡便な方法でオンデマンド型アクティブラーニングが実施できないか研究課題である。

学融合ゼミナールⅠ「研究成果」−調査（R5・2・2）

クロスディシプリン教育チーム

【学科名】（人文学科）

以下の項目について回答してください。3月10日までにお願いいたします。

1　授業設計

「人文学のダイナミズムと公共政策の視点」をテーマとして、公共政策学科との学融合ゼミナールを実施した。人文学科がもとより備えている学際性を活かし、公共政策の研究方法を多彩な方向から導入することによって、さらに広いパースペクティブを獲得することを本授業の目的とした。初回の授業では、人文学科での学びと公共政策学科での学びをどのように結びつけることができると思うかについて話し合うためのグループワークを実施した。第2回目から第10回目までは、オムニバス形式の授業を実施し、第11回目以降の授業では、5～6名程度のグループを作り、今までの講義内容を振り返り、各グループで関心を持ったテーマについて、さらに深く調べ、発表した。発表の内容として、下記の4つの点についてグループで話し合い、まとめるよう指示した。(1) 問題提起（各授業で関心をいだいたこと、疑問に思ったことをいくつか挙げ、その関連性を考える）、(2) 現状把握（何がそれらに共通の問題であるかを探り、授業内容や自分たちで調べたことから現状を把握する）、(3) 問題への積極的な対応や解決の方法の提案（どのような前向きで積極的な対応が可能か、どのように解決できるか）、(4) 結論（問題⇒提案のまとめ）である。

2　コーディネーターの役割

- 公共政策学科のコーディネーターとの日々のやり取り（振り返りレポートの受け取り等）
- 人文学科所属教員の第2回目から第5回目の授業振り返りレポートの評価
- 受講者の出欠確認、質問対応
- 各講義での進行役

3　cross 先学科との連携による成果

- 公共政策学科のコーディネーターとは、常にメールで連絡を取り合いながら進めることができた。
- 第6回から第10回目の授業では、公共政策学科所属教員に各専門分野に関する講義を依頼し、教員自らの専門分野の学問領域と人文学科の学問領域のつながりについても学生たちは理解を深めることができた。

4　クロスディシプリン教育に関する感想

期末発表では、人権問題を取り上げる学生が多く、各学生の専門分野の学問領域と公共政策学科の学問領域を統合的に学んでいることを発表内容から確信することができた。日本社会が直面している難民問題等の複雑で多様な現代社会の課題をテーマとして取り上げるグループが多く、学生は、問題提起、現状把握、問題への積極的な対応や解決の方法の提案等についての考えをわかりやすく説明することができていた。学融合ゼミナールでの学びを通じ、学生が積極的に社会と繋がっていくことを期待したい。

５　問題点等があれば記述してください

特にございません。

学融合ゼミナールⅠ「研究成果」ー調査（R5・2・2）

クロスディシプリン教育チーム

【学科名】（歴史学科）

以下の項目について回答してください。3月10日までにお願いいたします。

1　授業設計

クロスディシプリンの実現を目的として「歴史学と地域」をキーワードに授業を設計した。学科の専門領域では、日本史、東洋史、文化財・考古学の各分野を関連させ、対象とする地域において歴史的に生成された豊かな地域性や多様な課題についての理解を深めること、また横断的領域では、現在の地域社会における観光・環境・災害などの実態とともに、それぞれの分野で直面している課題を認識することを目指した。その上で、それぞれの専門知を「融合」させた多面的・重層的な思考を身につけるとともに、日々学んでいる歴史学の成果をどう地域社会に還元していくかを考えてもらうきっかけとなることを目的とした。

2　コーディネーターの役割

コーディネーターの役割としては、授業開始前と開始後に大きく分けられる。

＜授業開始前＞

- 専門パート ・・・・・・ 大まかな授業計画を策定した上で、学科会議にて自学科の先生方に対して授業内容を説明。その上で、担当教員・担当回を調整。
- 横断パート① ・・・・ クロス先のコーディネーターの先生と複数回の打ち合わせを行い、本学科で行って欲しい授業内容を説明し、担当教員の選定を依頼。
- 横断パート② ・・・・ 今回の学融合ゼミナールⅠの授業目的に専門分野が合致するクロス先以外の学科の先生に個別に授業を依頼。

＜授業開始後＞

- 第1回の授業において、本授業の全般的な説明を行った。また各回、教室の機器の設定、授業開始時の出席の確認、遅刻者への対応などを行った。
- T-poにて、毎回の授業の資料掲示、事後学修の指示、学生からのQ＆Aへの対応。
- メールにて、クロス先の先生との授業の打ち合わせ。事後学修課題の提出物の送付。
- 各回の事後学修課題の評価の集計や最終的な成績評価など。

3　cross 先学科との連携による成果

横断パートで扱ったのが「観光・環境・災害」といった分野だったため、学生たちは自分たちの身近な問題として捉えることができたと考える。第14回目のプレゼンテーションでは、自らが学んでいる歴史学の視点を取り入れながら「観光・環境・災害」にかかわるテーマで発表を行い、それを加筆・修正したものをアカデミック・エッセーとしてまとめて提出した。

4　クロスディシプリン教育に関する感想

学生の授業評価アンケートの自由記述欄では好意的なコメントが多かった。主なものとしては「視野がひろがった」「新たな視点を持つことができた」「学ぶ意欲が高まった」などである。したがって授業の到達目標についてはある程度達成したと考えられる。ただしアンケートの

集計結果を見ると、学生自身の授業に対する積極性が低い点は気になった。また提出されたレポートの内容などから判断すると、多面的・重層的な思考の修得というところまでは到達できなかったのではないかと考える。

5　問題点等があれば記述してください

学融合ゼミナールⅠ「研究成果」－調査（R5・2・2）

クロスディシプリン教育チーム

【学科名】（公共政策学科）

以下の項目について回答してください。3月10日までにお願いいたします。

1　授業設計

「学融合の視点から『公共』について考える」をテーマに、講義パートでは、公共政策学科4人、人文学科5人の教員がそれぞれの専門分野からの講義を行った。学生たちはその知見をふまえて、今後どのような学びを行いたいか、具体的には第3Qで実施するフィールドワークでどのように活かしていきたいのか、というテーマでアカデミックエッセイを作成し、そのアカデミックエッセイをもとにグループワークを行い、発表会を実施した。

2　コーディネーターの役割

- 前年度中に講義パート部分での出講する教員、講義のテーマ等の調整を行った。
- 人文学科のコーディネーターとは、講義実施に合わせてコミュニケーションシートの採点結果の報告等の連絡を行った。
- コーディネーターが毎回講義に参加し（他学科に出講の際には代理を依頼）、出欠管理と教室管理を行い、講義の前と後で学生への説明・連絡を行った。
- コミュニケーションシート、アカデミックエッセイ、プレゼンテーションの採点管理、全体的な成績評価の原案作成と学科への共有・最終的な成績入力を行った。

3　cross 先学科との連携による成果

- 本学科は、人文学科と人間科学科の2つの学科との cross となった。先に交渉が先行していた人文学科とはお互いの教員が5回分のパートを出講し合う関係を構築できた。人間科学科には本学科の教員5人が出講した。次年度以降は人間科学科とも出講し合う関係を構築する予定である。
- 成果としては、公共政策学科パートの講義では、政治学、メディア社会学、観光学、環境学の見地から、人文学科パートの講義では、哲学、宗教学、文化人類学、教育社会学、言語学から「公共」についての見解を講義いただけた。「公共とは何か？」という唯一の解がない問題設定とはなるが、それぞれの専門分野で「公共」の領域があることを確認でき、「公共について考える」上でさまざまな視点や知識を得ることができた。

4　クロスディシプリン教育に関する感想

- 現状の本学科のカリキュラムでは、他学科の講義が履修できない状況であり、学生たちが他学科の講義を受講できる大変貴重な機会となった。
- 前述と重複する部分も出るが、「公共」でイメージされる、政治学、法律学、経済学だけではなく、人文学の領域でも「公共」の領域があり、議論されていることを学生たちが知ることができたのは大きな収穫といえる。

５　問題点等があれば記述してください

- 学生に「学融合」の意義、特に他学科教員の講義が受けられることについて、その魅力を十分に伝えきれなかったことが課題となる。コーディネーターが講義中は学生の出欠管理や教室管理に追われてしまったことも反省点といえる。
- 開講初年度ということもあり、毎回講義を実施することが「目的」となってしまい、その先にある「学融合」の姿を学生に十分に伝えらなかったことが課題となる。理想論ではあるが、関係するすべての教員が毎回講義に参加し、必要があればその場で活発な議論を行う等、教員間で「学融合」の議論を重ねていき、それを学生たちに見せることも本来必要といえる。
- 一部の学生から、人文学科だけではなく、他学科の学びを受講したい、という声が挙がった。学生のニーズはさまざまなので、すべてに対応することは困難である。ただ、理想論になるが、同時間開講の学科であれば自由に選択し履修できるようにし、学生が自発的に「学融合」の学びができるようになるとよいのではないかと思われる。

学融合ゼミナールⅠ「研究成果」ー調査（R5・2・2）

クロスディシプリン教育チーム

【学科名】（人間科学科）

以下の項目について回答してください。3 月 10 日までにお願いいたします。

1　授業設計

現代日本における地域社会の現状について学融合の視点から俯瞰できるようにした。人間科学科の教員（4 人）は社会学の方法や概念を用いて地域を分析する視点を提供し、公共政策学科の教員（5 人）は地域のおかれた現状についての概説と日本社会全体の課題として考える枠組みが提供された。学生は関心のある地域の魅力を紹介する動画を作成し相互評価をする課題、日本の地域の現状に関する考察を行うレポートの執筆に取り組んだ。

2　コーディネーターの役割

授業概要・各回概要のテーマについて立案をし、それらにもとづき担当教員への依頼を行った。前年度の 12 月に担当教員全員で会議を行いコーディネーターから学融合ゼミナールⅠの主旨を説明したうえで授業概要・各回概要案の提案をし、授業運営・成績評価の方法などの詳細を決定した。各回の授業では学生からの質問への対応や課題の説明を行った。その他に出席管理と成績評価の取りまとめを担当した。

3　cross 先学科との連携による成果

学科にも地域をテーマとするⅡ類科目はあるものの、地方自治行政の枠組み、財政の現状、観光マーケティングといった学科Ⅱ類科目では扱われない実務的な知識に触れることができ、多くの学生とって有益な授業となったようである。具体的な成果については進路や卒業論文のテーマなどに反映されるはずであり、中期的視点でみていく必要がある。

4　クロスディシプリン教育に関する感想

コーディネーターとしては他学科教員と授業内容や授業運営のやり方について議論し、授業を進める経験はこれまでになく、多くの学びや気づきを得ることができた。学生は「地域」について数多くの視点や論点があることを実感し、政策的な観点と社会学による分析的観点との違いを意識することができたのではないだろうか。

5　問題点等があれば記述してください

学融合かつオムニバスの授業という性格上、多様な論点・視点が提供されるため、学生には授業全体としてまとまりに欠けている印象を与えがちである。また、本学科は多くの受講者がいたため、学生とのリアルタイムでの対話を重視した授業運営が十分にできなかったことは今後の課題であるといえる。

学融合ゼミナールⅠ「研究成果」ー調査（R5・2・2）

クロスディシプリン教育チーム

【学科名】（地域創生学科）

以下の項目について回答してください。3月10日までにお願いいたします。

1　授業設計

授業目的に設定した「異なる分野の専門知を横断的にとらえ新たな知として形にする力の育成を目指し複数の分野・領域の連携と融合」を実現するため、地域創生学科の強みである学際性を活かす教員配置を行った。これにより、学科パート内においても、経済学・経営学・社会学・教育学など幅広い専門分野の視点から地域について考える機会を提供することを試みた。

「地域創生学の融合」では、多面的な性質をもつ地域の課題解決ため人文科学の視点から、地域について考える思考を修得することに取り組んだ。具体的には、歴史学からみた地域性、臨床心理学からは子どもに関わる課題を通して地域社会との関わりや課題を学ぶ機会を提供した。

2　コーディネーターの役割

コーディネーターには、様々な配慮が必要な役割があった。具体的には、以下の通りである。

①「学融合」の概要と目的について学科パート担当教員への周知、学科内のオムニバス科目との差別化ならびに認識合わせ

② 学科パートとして「学融合」テーマの一貫性の担保と学生への周知。（具体的には「研究とは何か、どのように問題意識を見つけていくのか」、教員の経験に基づく事例の紹介など）

③ crossパートの2学科コーディネーターとの段取りや運営に関わる打ち合わせ

④ crossパート担当教員への講義依頼と資料準備等の情報共有

⑤ 学科パート教員・crossパート担当教員・学生と3方向に向けた共有ツールの運営管理

⑥ 学科パート・crossパート登壇教員向けに、学生コメントシートの共有と質問の回答収集

⑦ プレゼンテーションテーマ、最終レポートテーマの設定と評価

⑧ 毎回のリアクションペーパー管理、課題管理、成績評価管理

⑨大教室・大人数に対する教室運営（出席管理・学修環境に関する配慮や教室環境に関わる対応）

上記以外にも、様々な業務が発生する形になりコーディネーター1人で対応するには負荷が大き過ぎることが開講後に明らかになった。授業運営としては、トラブルもなく進めることができたが、通常の専門科目と比較してみても多くの労力をこの講義にかけることになった。事前にそこまでの想定ができなかったことも含め、大人数の講義運営に対する体制構築の必要性を実感した。次年度はさらに講義数も増えるため、負荷を分散することが重要になってくる。スムーズな授業運営のため次年度は、科目担当教員を配置したが、継続的な協力体制構築が必要である。

3　cross先学科との連携による成果

本学科の2・3年生は、地域創生についての基本知識修得と並行して自分自身の研究テーマを探索する時期にある。その過程にある学生にとって他学科の教員から学ぶ機会は、大きな刺激になったと考えられる。crossパートの講義は、地域にはその場に暮らす人びとが存在し、その人びとによって社会が形成されるという点からテーマを検討することの可能性が示唆される内容であった。

今後は、学生自身がこういった視点の重要性を、どのように自ら認識するのか、研究テーマの可能性として落とし込むことに繋げていけるのか、が課題である。

4　クロスディシプリン教育に関する感想

地域創生学科は、創設当初から学際性を基本として、様々な専門分野の教員が「地域」についての課題発見や解決に向けた学修の場を提供している。そういった意味から考えると、当学科の学生は既に幅広い分野の学びは経験済みであり、大学での学び＝クロスディシプリン教育として自然に受け入れている。

このような状況下、学科パートの内容についての組み立ては、他学科にはない難しさがあった。今回、敢えて学融合という形で講義を設定するにあたり、既に実績があるオムニバス形式の科目との差別化が大きな課題となった。この点については、今まで提供する機会がなかった各教員の研究分野に踏み込んだ形で「研究とはなにか」の探索を共有目的として設定することで内容の重複を防ぐ工夫を行った。

このような課題はあったが、異なる分野の専門知を横断的にとらえる機会を提供することには、成果もあったと思われる。具体的には、自身の所属する学科の独自性や、同じ事象であっても異なる視点から考えることで見え方が異なるという気づきにつながった。さらに、専門性の異なる分野であっても「研究」や「問いの立て方」には、共通点もあり、卒業研究を進める上でのヒントとして考える機会に結びついた学生が多くいた。この点は、リアクションペーパー、プレゼンテーションや小論文から確認することができた。

一方で、自分自身の興味関心分野が明確に決まっている学生には、別の視点を取り入れることに抵抗を感じるケースもあった。また、研究テーマや問題意識を見出す行動に至っていない学生にとっては、他学科の新たな視点を受け入れる行為自体に意味を見出せない実態も明らかになった。この点については、Ⅱ類コーディネーター間での情報共有なども含め、他学科の状況を知ることで解決方法を検討することが可能になると考える。

5　問題点等があれば記述してください

①大人数が履修する科目の課題として、プレゼンテーションを必須にすることには無理がある。プレゼンテーションはパワーポイント作成スキルのみでなく、人前で実施することに意味がある。人数と場所、評価者の配置などを考慮すると 100 人越えのクラスでプレゼンテーションを実施することは物理的にも難しい。プレゼンテーションの機会は、学科内の別の講義で設定する形にして、学融合科目の評価からは外すことを希望する。

② 2023 年度は、学融合科目が４つ（実質的には３つ）になる。上記４の感想にも記入しているが、他のオムニバス形式の講義内容との差別化に苦慮している状況下、学融合科目内での差別化が更なる課題として出てきている。これはコーディネーター個々人で対応することは難しいのが現状である。講義を担当する先生方に説明するための資料や情報、特に４つの違いについて、もう少し明確に説明できる参考資料を共有していただけると混乱なく講義内容の準備依頼が可能になる。是非、お願いしたいと考えている。

③学融合科目数が増えたことにより、コーディネーター１名での対応が不可能となった。対策としてそれぞれの科目担当教員を配置する形にしたが、これによりコーディネーターがシラバス等も参照できない状況になってしまった。科目担当とⅡ類コーディネーターの位置付けが不明確になっている。役割と責任の定義も含め、改めて確認が必要だと考える。

Go to 100

大正大学